

1 放送による聞き取りテスト (10点)

2 後の問いに答えよ。(12点)

問一 次の(1)～(4)の——の漢字の読みがなを書け。
また、(5)～(8)の——のカタカナの部分かじしよを楷書で漢字に書き改めよ。

- (1) 津軽の田園地帯は出穂期を迎えた。
(2) 城ヶ倉溪流に架橋された大橋を渡る。
(3) 校旗が翻る甲子園球場に臨む。
(4) 津軽海峡を前に漁師たちが漁網を繕う。
(5) 全力で走り続けて遅刻をマヌカれた。
(6) 擬態で目をアザむく蝶を観察した。
(7) 早春の十和田コハンを散策する。
(8) キュウリヨウ地帯にりんご畑が広がる。

問二 次の——のカタカナを漢字で表したとき、その漢字と同じ漢字が使われている熟語はどれか。

- (1) ファインプレーにスタンド全体からカン声が上がった。
①感動 ②交換 ③生還 ④喚起
- (2) 青森県は縄文土グウの宝庫で国宝に指定されたものもある。
①偶然 ②竜宮 ③遭遇 ④一隅

3 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(12点)

【文章Ⅰ】

孟子曰、古之君子、過則改之。今之君子、過則順之。古之君子、其過也如日月食、民皆見之。及其更也、民皆仰之。

——「孟子」より——

孟子曰く、古の君子は、(君主は)過てば則ち之を改む。今の君子は、過てば則ち之に順ふ。古の君子は、其の過つや、日月の食のごとし。民皆(君主が過失をあらためるとなると、人民は皆、君主を振り仰いで尊敬する。)之を見る。其の更むるに及ぶや、民皆之を仰ぐ。

【文章Ⅱ】

改めて益なき事は、改めぬをよしとするなり。

——「徒然草」より——

問一 過1テバと同じ意味の「過」を含む熟語はどれか。

- ① 過失 ② 通過 ③ 過激 ④ 過去

問二 過2テバ則チ順レ之ニの意味として適当なものはどれか。

- ① 自分の過ちに人を従わせようとする。
② 自分の過ちをそのまま押し通す。
③ 人の意見に従い、過ちを直そうとする。
④ 人の意見に従わず、過ちを正当化する。

問三 二重傍線部に返り点を施せ。(送り仮名は書かないこと)

問四 日月の食³ とは何のことか。

問五 次に掲げるのは、授業の中で【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】について話し合った会話である。これを読んで、後の(i)と(ii)の問いに答えよ。

生徒A 【文章Ⅰ】では良くない結果に陥ったときの態度の違いを、古の君子と今の君子を対比的に述べているね。

生徒B でも【文章Ⅱ】はこういう意味なんだろう。インターネットには「直してもどうにもならないものは、ぶっ壊した方がよい。」って出ていたけど、本当なのかな？

生徒A あれ、よく読んでみると【文章Ⅰ】では「あらためる」という漢字に「改」と「更」の二種類が使われているよ。

先生 いいところに気が付いたね。それぞれの漢字の意味の違いを漢和辞典で調べてみよう。何かわかるかもよ。

かい【改】

①変化する。変更する。

②訂正する。正しいものに直す。

こう【更】

①新しいものにかえる。

生徒A なるほど。では、古の君主は、Xから、人民の尊敬を集めるというわけだ。

生徒B わかった！【文章Ⅱ】の意味は、Yということなんだね。やっぱり、インターネットの情報をうのみにせず、自分で調べないとだめだね。

(i) X に入る最も適当なものはどれか。

- ① 過ちを明らかにし、新たに再出発しようとする。
- ② 過ちを隠蔽し、新しい君主を位に就かせようとする。
- ③ 失敗を振り返らず、新しい政策に挑戦しようとする。
- ④ 自己の至らなさを認め、周囲の人々に協力を求める。

(ii) Y に入る最も適当なものはどれか。

- ① 変えることによって新しいことを学べるので大切だ。
- ② 直すことで新しくなるなら、すぐに直すべきだ。
- ③ 新品にあらためると損をするので、しない方がよい。
- ④ あらためても意味がないことは、そのままの方がよい。

4 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(35点)

(設問の都合で、原文を一部省略、改変したところがある。)

ひろ子はいつものように弟の寝ている布団の裾をまくり上げた隙間で、朝飯を食べ始めた。あお黒い小さな顔がまだ眠そうに腫れていた。台所では祖母がお釜を前に、明かりにすかすようにして弁当を詰めていた。明けがたの寒さが手を動かしても身体中にしみた。どこかで朝の支度をする音が時たま聞えた。

ひろ子は眉の間を吊りあげてやけに御飯をふうふう吹いていたが、やがて一膳終るとそそくさと立ち上がった。

「おや御飯は」

「おしまい」

ひろ子はもう火鉢の抽出しから電車賃を出していた。

「おしまいじゃないよ。もう一杯食べといで、まだ遅くなりやしないから。さあ」

「だつて急いで食べられない」

祖母の手に茶碗を渡してやりながらひろ子は涙声を出した。

「急いで食べられないつたつてお前こんな寒い日に熱い御飯でもたべなきやごごえてしまうよ」

「だつて遅くなると困るんですもの」

つい四、五日前に彼女は初めて遅刻した。だが彼女の工場に遅刻がなかった。工場の門限はきつちり七時であった。遅れた彼女はその日一日を否応なしに休ませられた。彼女達の僅かな日給では遅刻の分を引くのが面倒だったから。

その日彼女は電車の中で遅れそうなことを感づいた。身ぎれいな女などが乗り始めていて労働者風の姿が消えていた。彼女は車内の空気で時間を見つけようとするように落ちつきなく目を走らせた。

あたりが、変わったように思われた。電車はひろ子が下りる一つ

手前までもう来ていたのに。停留所のちよつと手前に電車道に沿って、彼女の工場の赤煉瓦が長屋のように横につづいて、その中の一つに彼女の入口があった。ひろ子は見落とすまいと、その一つ一つの入口を見つめた。押されるように何かがかまわるような嫌な腹痛を覚えた。

彼女は電車から入口へ駆けつけた。そして電車で見ただ通りだった。彼女が家を出たのは暗い内だった。彼女の電車賃は家内中かき集めた銅貨だった。だが彼女の前には鋼鉄の鉄戸が一ぱいに下りていた。彼女は間に合わなかった。工場の門限は七時だ。彼女は、

X そこを通りぬけた。彼女はマントの下で弁当箱を両手でしっかりと抱いてそれで胸の上をぐつと押さえて歩いた。彼女はベソをかいていた。人通りが多くなっていた。往来は彼女の朝から別の朝へ移っていた。

ひろ子はごごえるよりも遅刻がおそろしかった。

祖母に咎められながら朝食をすませたひろ子は、襟巻に顔をうずめて、戦さに行くような気持ちで歩いて行つた。外は研ぎ立ての包丁のような夜明けの明かるさだ。そしてきしむように寒い。橋の上では朴歯が何度かすべつた。

まだ電灯のついている電車は印半纏や菜葉服で一ぱいだった。ひろ子は大人達の足の間から割り込んだ。彼女も同じ労働者であった。か弱い小さな労働者、馬に食われる一本の草のような。

「感心だね、ねえちやん。何処まで行くんだい」

席をあけてくれた小父さんが言葉かけた。

「お父ちゃんはどうしてんだい」

「仕事がないの」

ひろ子はそれを言うのが恥ずかしかった。

「おや、あそんでるのかい。そいつはたまらないな」

そう言つて彼は親しげな顔付きをした。その車内では周囲の痛ましげな目が一斉に彼女の姿にそそがれはしなかった。彼らにとつて

はそれが自分達自身のことであり、彼女の姿は彼らの子供達の姿であつたから。

【中略】

「ひろ子も一つこれへ行つて見るか」

ある晩父親がそう言つて新聞を誰にともなく投げ出した。茶碗を持つたまま新聞を覗いたひろ子は、あまり何気なさそうな父親のその言葉にまごついた。あのキャラメル工場が女工を募集していた。

ひろ子はうつむいてしまい、黙つてむやみに御飯を口の中へつめこんだ。誰も黙つていた。

「どうした、ひろ子」

しばらくして父親はそう言つて薄笑つた。

「だつて学校が……」

そう言いかけるのと一緒に涙が出てきた。

「まだお前、可哀想に……」

「あなたは黙つてらっしゃい」

父親が祖母を頭からおつかぶせた。ひろ子の弟がなぐさめ顔で時々そつとひろ子をのぞいた。床の中で病人は仰向きに目をつぶつていた。

あくる日ひろ子はその工場の事務室に、事務員と父親の交渉の間ぼつんとほうり出されていた。

「十三、あそうですか」事務員は名前や何かを書きとつた。

「まだほんとの子供でいろいろ御面倒ですが」

「はあ、いや、それでこの規則はこれになっていきますが」

事務員は父親の個人的になりそうな話を遠慮なく撥きながら話を進めた。

かえり道で父親はひろ子を蕎麦屋へ連れてはいつた。前ごごみに胡坐かいて低いお膳の上で酒をつぎながら父親は上機嫌だつた。

「すこし道が遠いけれど、まあ通つて御覧。学校の方はまたそのうちどうにかなるよ」

実際その工場までは電車だけで四十分はかかるはずだつた。だがそれよりも彼女の日給で電車賃をつかつては間しやくに合わないのであつた。女工達はみんな徒歩で通える所に働きの口を探す。でなければ大工場へ住み込んでしまふ。しかしひろ子の父親はそんなことは考えなかつた。その工場の名がいくらか世間へ知れていたので、そこへ気が向いたに過ぎなかつた。

ひろ子は次の日からY通つた。【中略】

ひろ子が工場へ通い初めてから一カ月ばかりがすぎた。

その日ひろ子のかえりの電車賃がなくなつて歩いてきた。これまでは朝も歩かねばならないことがあつた。そんな時は祖母が一緒に行つてくれて、二人が二時間近くも歩き、やつと工場の近くへ行く頃行く手に当たつて街灯が一斉に消えるのだつた。【中略】

ひろ子は雑炊の湯気で赤くなつた顔を上げて言つた。

「外から帰つてくると、こうして熱い御飯を食べるのが何よりの楽しみよ」

ひろ子は家へ帰つてくると一つぱしの働き手になつた氣であつた。

「はゝゝ、生意氣を——どうだねこの頃は、やつぱり二つ半かいい？」

揶揄的な父親の言葉でひろ子は赤くなつてうつむいた。

工場ではこの間から日給制が止められて、一罐の賃金を数えるようになった。一罐七錢だつた。仕事に慣れた娘たちにとつては収入が多くなつた。しかし大方の娘たちは、今日までの日給と同じ賃金を取るためにはもつともつとその身体を痛めつけねばならなかつた。彼女達は今までにもう精いっぱい働きのしていた。日給が罐の計算になつたからと言つてすぐにそれだけ多く働出すことはとても不可能だつた。一せいに収入が減つた。ひろ子などは三分の一に値下げされた。彼女達は今までの日給額に追いつがるために車を回すコマ鼠のようにもがいた。

「なかなかね。備い手の方でも抜け目なく考えているからね」

祖母がすんと鼻をすすつて、仕事の帽子を裏返しながら言った。「ところでひろ子どうだい、このまま行つて幾らかうまくなれそうかね」

父親が煙草の火をつけながら言った。

「えゝ、一生懸命やつてるんだけど」

「いつそもうどうかね。止めにしたら」父親はまた何でもないように言い出した。ひろ子はハツとして顔を上げた。

「そしてどうするの」

「しようがない、後でまたどうにかなるさ」

「少し無理だな今の所は、遠くて」

病人が絵具の筆をおいて寝返りながら言った。父親はその言葉に力を得て今度ははつきり切り出した。

「止せ止せ、しようがないよ。——毎日電車賃を引けや残りやしないじゃないか」

ひろ子はそれが自分の力の足りない女のように思われた。

—— 佐多 稲子「キヤラメル工場から」より ——

(注1) 朴歯 朴の木で厚くつくつた下駄の歯。または、その歯を付けた下駄。

(注2) 印半纏 襟や背中に屋号を染め抜いた半纏。商家の使用人や職人が着用した。

(注3) 菜葉服 薄青色の作業服、特に工場労働者が着用する作業服のこと。

(注4) 間しやくに合わない 割に合わない。損になる。

(注5) 一罐の賃金 ひろ子たちの、キヤラメルを包装し缶につめる仕事は歩合制になったということ。

問一 そそくさ¹と 否応なし²の本文中の意味はどれか。

- (1) そそくさと
- ① ゆっくりと落ち着いて
 - ② 急いであわただしく
 - ③ 静かに気づかれないように
 - ④ 怒って勢いよく

- (2) 否応なし
- ① 嫌がっても無理やり
 - ② 自分の意志で喜んで
 - ③ 事情を知らずにうっかりと
 - ④ 特別な事情があったので

問二 本文中から、朝の空気と光が冷たく鋭く感じられる様子を表す直喩表現の箇所を十一字で抜き出せ。(句読点は含まない)

問三 X Y に入る言葉として最も適切なものはどれか。

- X
- ① ルンルンと
 - ② ハキハキと
 - ③ コソコソと
 - ④ スタスタと

- Y
- ① きびきびと
 - ② てくてくと
 - ③ いせいそと
 - ④ しよぼしよぼと

問四³ その日彼女は電車の中で遅れそうなことを感づいたのはなぜか。

- ① 電車の中で見かける人がいつもと違ったから。
- ② 車掌に「電車が遅れている」と言われたから。
- ③ いつもよりゆっくり朝ご飯を食べてしまったから。
- ④ 電車から見える風景がいつもより明るかったから。

問五⁴ ひろ子は見落とすまいと、その一つ一つの入口を見つめたところがあるが、ひろ子はそのとき、入口の何を確認しようとしたのか。本文中から五字で抜き出せ。

問六⁵ 押されるように何かがかまわるような嫌な腹痛を覚えたとは、ひろ子のどのような心情を表しているか。

- ① 遅刻をしたことに対する諦めと絶望感。
- ② 学校を堂々と休めることの嬉しさと期待。
- ③ 工場でのつらい仕事への嫌悪と拒否感。
- ④ 日当がもらえないかもしれない不安と心配。

問七⁶ 親しげな顔付きとはどのような様子か。

- ① 家族のためにけなげに早起きをしていることへの賞賛の様子。
- ② 仕事も辞めてしまい遊びほうけている父親への侮蔑の様子。
- ③ 自分と同じような境遇にあるひろ子たちへの共感の様子。
- ④ 娘を働きに出させ、自分だけ遊んでいることへの憤りの様子。

問八⁷ ひろ子はうつむいてしまい、黙ってむやみに御飯を口の中へつめこんだの説明として適切なものはどれか。

- ① あまりの衝撃で、何かを話そうとすると涙が出てしまうので、黙っていることで悲しみに耐えようとしている。
- ② ここで父親に反論したとしても、いつものように言い負かされるだけなので、黙って無言の抵抗を示している。
- ③ 学校に行かなくてよいという父親の考え方にすっかり呆れてしまい、話し合いも無駄だろうと絶望し、黙っている。
- ④ 深い悲しみに沈んでいる様子を見れば、祖母や弟が父親を説得してくれるだろうと踏んで、あえて黙っている。

問九⁸ 父親は上機嫌だったのはなぜか。

- ① 「ひろ子」が名の知れた工場に働きに出ることで、自分が遊んでいても家計に影響が出なくなるから。
- ② 「ひろ子」が名の知れた工場で働くことで、娘を働かせる自分の面目も保てるから。
- ③ 十三歳の「ひろ子」では、就業を断られる可能性もあったが、思惑通りに事が運んだから。
- ④ 始めは仕事を嫌がっていた「ひろ子」も、最終的には自分の言うことを素直に聞き入れてくれたから。

問十 ひろ子はそれが自分の力の足りない女のように思われたのはなぜか。

- ① キャラメル工場での仕事に慣れ、自信が湧いてきたから。
- ② 精一杯働いても収入が少なく、自分が情けなく思えるから。
- ③ 生活を支えるための収入が急に減らされて動転したから。
- ④ 雇い主が一方的に収入を少なくしたことに憤りを感じるから。

問十一 次の文章は、二〇一四年十二月二十七日に「日本経済新聞」に掲載された記事である。これを読んで後の問に答えよ。

佐多 稲子「私の東京地図」

長崎生まれの佐多稲子にとって、隅田川を挟んで向かい合う向島と浅草は、第二の故郷と言っているいい土地だった。長崎の造船所を退職して上京した父は、叔父佐田秀実が見つけた本所区（現墨田区）の向島小梅町の長屋に一家で住んだ。土手下の路地の奥で現在は隅田公園の一画である。

向島は、江戸庶民が隅田川の風光を楽しむ近郊の行楽地だった。稲子は、その向島の小学校に入学するも、生活難から通学をやめ、対岸の浅草や神田、上野などの飲食店や工場へ働きに出る。本書の前半は、その頃の体験に基づいている。

とりわけ印象深いのは、浅草側と対岸を結ぶ吾妻橋を巡る記述である。向島小梅町の家近くには当時、江戸時代から続く渡船「竹屋の渡し」があったが、「私たちは一銭の渡しも惜しんで吾妻橋へ廻まわってゆく」。遊びに行くときだけではない。電車に乗るお金がないときは、今の秋葉原の近くにあったキャラメル工場まで暗い早朝

から、向島から歩いて通ったのである。

「私」に文学の世界を教えた叔父が二十五歳で早世するときも、「私」は勤め先の料亭から向島の家へと吾妻橋を駆けて渡った。「先生は、川の上を飛ぶカモメをさして『都鳥注1という』と叔父が教えてくれたことを吾妻橋で思い出深そうに話してくれました」。文学散歩をとにした佐多稲子研究会の五十嵐福子さんは話す。関東大震災のときも、渦巻く黒煙を見ながら「私」は吾妻橋の上を走って帰った。

「つらくなると吾妻橋に来ることがある」。佐多からそんな言葉を聞いたのは、同研究会の伊原美好さんだ。「吾妻橋を渡る少女は、いつも一生懸命涙をこらえて、走るように歩いた」。そう後年の随筆に書いた作家にとって、この橋と川は、心のよりどころでもあったのだろう。

今の吾妻橋近辺は、すっかり観光地に整備され、水上バスが行きかい、ビルの向こうに巨大な東京スカイツリーが顔をのぞかせる。少女が涙をこらえて渡った記憶は、遠い幻のようである。

（編集委員 宮川匡司）

（注1）都鳥 『伊勢物語』で都を捨て、東国に旅をする主人公が、隅田川のほとりで、船頭から見知らない鳥の名を「都鳥」と教えられたときに詠んだ歌にちなむ。

名にし負はば いざこと問はむ 都鳥 わが思ふ人は
ありやなしやと

（「都」という名を持っているのなら、さあ尋ねよう、
都鳥よ。私が恋い慕う人は無事かどうかと）

(1) この橋と川は、心のよりどころでもあった とあるがなぜか。

① 貧窮生活の中で涙をこらえて橋を渡りながら懸命に働きの向かう日々の記憶としての場所であり、辛いときほど自分が必死に生きてきた証を思い出し、心を支えてくれる場所だったから。

② 貧しさの中でも祖母や叔父と川辺で楽しく過ごした思い出があり、その記憶が大人になってからも幸せな気持ちを思い出させてくれる場所だったから。

③ 家族の貧しさと自身の無力さは、一生消えない傷として彼女の記憶に刻みつけられたが、逆にそのことよってたくましく成長したと思える自立の象徴となる場所だったから。

④ 大人になってから散歩するたびに川の景色が美しく、懐かしいノスタルジックな気持ちにさせてくれる場所であり、日々の疲れを癒す景色が残る場所だったから。

(2) 「キャラメル工場から」と記事からわかる「叔父」の人物像として最も適切なものを次の中から選びなさい。

① 病弱で寝込んでいることが多く、家族の会話には全く関わらず、一人で絵を描くことだけが楽しみだった人物。

② 病気のため寝たきりの状態だったが、ひろ子がキャラメル工場を辞めたがっていることをいち早く察知した人物。

③ ひろ子に文学の世界を教え、時には守ろうとする、貧しい生活の中で少女の心に光を与えた優しい人物。

④ カモメのことを浅草では江戸時代から「都鳥」と呼んでいるという文学的教養を、幼いひろ子に教えた人物。

5 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(31点)

最近、これからは電子書籍が紙の本を押しつけて、書籍の中心的な媒体になるという話がありましたね。そのトピック¹について、立て続けに「いったい紙の本はどうなるのでしょうか？」とあちこちのメディアから訊かれました。

僕は紙の本はなくならないと思います。というのは、iPadで読んでも、面白さが「何か」足りない気がするからです。いったい何が足りないのでしょうか。いろいろ考えました。そのあと、友人の平川克美君と会ったときにも、彼からも同じことを訊かれました。「iPadで本読んでる？ あれ、読めないだろう？」。その理由として彼が挙げたのは、僕が考えていたこととほとんど同じことでした。それは本の厚みがないということです。

だから、残りページがわからない。残りページがわからないと、本ってすごく読みにくいんです。たぶん、いろいろな理由がある。

第一の理由は、自分が本のどの部分を読んでいるかによって、言葉の解釈が変わってくるからです。

ミステリーの場合、作家は「Red herring (レッド・ヘリング)」³というものを使います。「レッド・ヘリング」というのは「赤い煙製ニシン」^{せい}のことです。昔、猟犬^{りょうけん}を訓練するとき、猟犬が正しい獲物を追跡するように、鼻の訓練をしました。「赤いニシン」は偽の餌のことです。ニシンの匂いにつられて、自分が本来追う獲物から逸れる猟犬は主人にこっぴどく叱られます。すぐれた猟犬はそんな匂いに惑わされない。そこから転じて「レッド・ヘリング」はミステリーの場合、読者を誤った推理へミスリードする偽の手がかりのことを指します。いかにも怪しげな人物が出てきて、不可解な行動⁴をする。これが犯人だろうと読者が思い込んで読むと、どんでん返しを食らう。そういう仕掛けのことです。

すぐれたミステリー作家はこの仕掛けの使い方が非常にうまい。

I、ミステリーを読み慣れた熟練した読者も同じように、「レッド・ヘリング」を予期していますから、簡単にはミスリードされない。いかにも犯人らしい人が出てきても、すぐには信じない。これは作者が仕掛けた「レッド・ヘリング」かもしれないと警戒しながら読む。

II、「レッド・ヘリング」は物語の終わりになるともう出てこないのです。残り四分の一を割ったら、まず出てこない。あと終わりまで数ページというところで、突然読者をミスリードするような仕掛けはどんな意地悪な推理作家もやりません。

III、読み慣れている人は直感的にわかるんです。残りが三、四〇頁^{ページ}になると、トランプの神経衰弱みたいに、それまで謎だったいろいろなことがばたばたと次々と解明されてくる。そういうファイナーレ間近の、物語のスピードが最後の加速をしてホームストレッツチに雪崩れ込んでくるときには、話の筋目を横に逸らすような「レッド・ヘリング」は絶対出てこない。「ポイント・オブ・ノーリターン」^{注2}、ここから先はもう「レッド・ヘリング」はなしです。ここから先に出てくる「怪しいやつ」はほんとうに怪しいやつ。そういう登場人物の解釈についてのルールが切り替わるポイントがある。読者はそれを残り数頁で見切るんです。同じようなエピソードでも、同じような形容詞でも、それが物語のどの頁に出てくるか、前のほうか真ん中あたりか終わりのほうかで、解釈が変わる⁵。そういうことを僕らは自然にやっている。皆さんはたぶん人間は同じ読解力、同じ読解ルールで本を最初から最後まで読み通していると思っただけかもしれない。違いますよ。実は一頁めくるごとに僕たちは解釈のしかたを変えている。

本を手にしたとき、残り頁数は、本を持っているときの掌が感じる左右の重量差でわかります。あと二〇頁くらい残り頁がある

とあって、これだと終わる前に、まだもうひと波瀾あるなと思って注意深く読み進み、頁をめくったら、突然「終わり」ということがあります。あと二〇頁あるなと思っていたうちの二八頁が新刊広告だったから。これはがつくりしますね。階段の途中でいきなり何段か抜けていて、床に転げ落ちたみたいなき落感がある。あと二〇頁あるつもりで読んでいたのに、不意に終わっちゃった。自分でぼんやり予測していた物語の構成が破綻⁶してしまうわけです。

こういうことを言う人はあまりいませんけれど、読書というのは、「今読みつつある私」と「もう読み終えてしまった私」の共同作業なんです。どれほどストーリーが錯綜^{さくそう}して、謎が深まっても、僕たちが忍耐強く推理小説を最後まで読めるのは、最後に名探偵がすべてを解決してくれて、「なるほど、そういうわけだったのか」と得心している「読み終えた私」を想定しているからです。その「読み終えた私」が保証人になってくれるからこそ、「今読む」ということができる。もし、読み終えてみても、犯人もつかまらず、謎も解かれず、すべてはうやむやのうち……という終わり方もあるかもしれないと思っていたら、推理小説なんかとても読めません。「読んでいる私」と「読み終えた私」は砂場で両側からトンネルを掘っている二人の子どものようなものです。掘り進めてゆくうちに、だんだん向こうからも掘り進む手が近づいてくるのがわかる。最後の薄い砂の壁が崩れると、手と手が触れあい、風が吹き通る。ああ、ついに出会えたという達成感がある。一冊の本を読み終えるというのは、そういうふうに「私が読み終えるのを待っていた私」ともう一度出会うことなんです。

電子書籍で困るのは、「X」の居場所がないということです。どこで待っているのか、わからない。だって残り頁数がわからないんですから。極端に言えば、自分が二頁で終わるショートストーリーを読んでいるか、二〇〇〇頁ある『戦争と平和』みた

いな長いものを読んでいるのかわからない。もちろん、デジタル表示で「残り何頁です」ということは見ればわかります。でも、頁数をチェックしながら、あと残り何頁だからそろそろ読み方を変えないといけないとか、そういう面倒なことは僕たちはできないんです。実際には、手に持った本の頁をめくりながら、手触りや重み、掌の上の本のバランスの変化、そういう主観的には意識されないシグナルに反応しながら、無意識的に自分の読み方を微調整しているんですから。その作業は微細⁷すぎて、読んでいる本人も自分が何をしているのか、気がつかない。

リテラシーというものはそういうものなんです。リテラシーというものは、自分では自分が何をしているのかわからないままに行使されている能力なんです。自分がどのようなリテラシーを駆使しているのかわからないから、それはリテラシーなんです。

電子書籍によって紙の本がなくなってしまうという人がいますが、そういうことを言う人は本をあまり読まない人じゃないかと思えます。いや、最近の情報にキャッチアップするために、情報入力のために本を読むことはするけれど、わくわくどきどきしながら時間を忘れて没入するために本を読むという経験があまりない人じゃないかと思えます。

ご飯を食べるのだからそうでしょう。真っ暗な部屋で、テーブルに置かれた大皿からラーメン啜^{すす}って食べても、ぜんぜん美味しくない。あれは、あとどれくらい汁が残っているかとか、二枚目のチャーシューはそろそろ食べてもいいだろうとか、最後の一口を口中に投じるときの麺とメンマのバランスは頃合いであろうかという、全体のプログラムの中で腹具合を按分^{あんぶん}しながら食べるから美味しいのであって、あとどれくらい麺や汁やチャーシューが残っているか「わからない」まま真っ暗なところで食わされても美味くもなるともない。

僕たちは本を読むときにただ情報を取り入れるためだけに読んでいるわけじゃありません。わくわくしたくて読んでいます。そのわくわく感というのは、ラーメンを食べるときに、つるつる食べ進むにつれて、食欲がしだいに満たされ、最後の一口をぐくりと嚙下するとき空腹感がびたりと収まるように計画しながら食べるときと同じで、自分で無意識のうちに「快樂の下絵」を描いているから得られるものなんです。

—— 内田樹『街場の文体論』より ——

(注1) ホームストレッチ

陸上競技などのトラックで、ゴールライン手前の直線走路のこと。ここでは、物語の最終部分のこと。

(注2) ポイント・オブ・ノーリターン

そこを過ぎると元の場所に戻れない、後戻りできない場所や状況のこと。

問一 トピック¹ 破綻⁶ の本文中での意味はどれか。

- (1) トピック
- ① 疑問
② 話題
③ 関心
④ 頂点

- (2) 破綻
- ① 物事がうまくいかなくなる
② 先が読めなくなる
③ 理解ができなくなる
④ 間違えた方向に進んでしまうこと

問二 空欄 I II III に入る語の

組み合わせとして最も適切なものはどれか。

- ① I つまり II なぜなら III だから
② I もちろん II なぜなら III さて
③ I つまり II ところが III さて
④ I もちろん II ところが III だから

問三 ² いったい何が足りないのでしょうか。とあるが、足りないものを本文から五字以内で抜き出せ。

問四 red herring (レッド・ヘリング) の特徴として、誤っているものはどれか。

- ① すぐれたミステリー小説では多く用いられている。
- ② 読者の推理を誤らせるような仕掛けのことである。
- ③ 読み慣れた読者には通用しないこともある。
- ④ 物語の終盤に出てくることはない。

問五 不可解な行動をする という文には、いくつ自立語があるか。数字で答えよ。

- ① 五段活用
- ② 上一段活用
- ③ 下一段活用
- ④ カ行変格活用

問六 変わる の動詞の活用の種類はどれか。

- ① 読みたいと感じている私
- ② 今読みつつある私
- ③ もう読み終えた私
- ④ 読まなかった私

問七 空欄 X に入る言葉はどれか。

問八 そういものなんです とあるが、その内容の説明として適当なものはどれか。

- ① 読書するということは、自分が知らないもう一人の自分と出会うことであり、これまで知っていたつもりであった世界をその本の作者の視点を通して再び見つめなおす作業である。
- ② 読書するということは、持っている本の左右の重量差によって解釈を変え、作者が提示する手がかりをきちんと受け取ることで初めてその本の内容を理解できるという作業である。
- ③ リテラシーとは、最新の情報を取り入れることに集中できるように、終わりなど考えずに時間を忘れて様々な物事を行うことができる能力であり、最近必要とされている能力である。
- ④ リテラシーとは、はっきりと数字には表れないものを受け取ったうえで無意識に行っている繊細な作業であるがゆえに、自分自身でもどうその能力を使っているのかが分からない能力である。

問九 ぜんぜん美味しくない のはなぜだと筆者は考えているか。

- ① 食事は、作った人の情報を事前に調査しておく、どういう人物がどんな思いでそれを作ったかを知っておくことで、達成感が生まれ美味しさを感じるものだから。
- ② 食事は、その料理を見ながら食べることで、どういったものを食べているのか頭で理解し、その材料や作られた背景を想像することによって美味しさを感じるものだから。
- ③ 食事は、大きい皿で食べると量が少なく見えることから、小さい皿で小分けに盛り付けられたものを食べる方が満腹感を得やすく、充実した気持ちになるものだから。
- ④ 食事は、食べ終わりを予測しつつ、あと皿に何がどれくらい残っていて、それをどう食べ進めていくか考え、味わい方を組み立てて食べることで満足感を感じるものだから。

問十 筆者は、読書と食事の関係をどのようなものだと捉えているか。

- ① 読書は始まるときの好奇心をもとに楽しみ、食事は終わりを見据えることで楽しむという点で、異なっている。
- ② 読書は終わりを見据えることで楽しみ、食事は始まるときの好奇心をもとに楽しむという点で、異なっている。
- ③ 読書も食事も、現在の楽しさを終わりまで維持できるように努める必要があるという点で、似たようなものである。
- ④ 読書も食事も、終わりを見据えることが現在の楽しさに繋がるといふ点で、似たようなものである。

問十一 この文章を読んだ四人の生徒が感想を述べている。その中で本文の記述に合った感想を述べているのはだれか。

- ① 生徒A 筆者は、紙の本では物質的な重さなどから無意識的に私たちが読み方を変えているんだと考えているね。
- ② 生徒B 確かに、厚い本を持ったときは、気合いを入れて読もうという気持ちになるよね。
- ③ 生徒C でも、電子書籍でも残りのページ数が表示されるから、読み方は変えられるんじゃない？
- ④ 生徒D 紙の本にも電子書籍にも、それぞれの良さがあって、目的で使い分けると良いということだね。

